



Title	＜ケア＞の担い手としての災害ボランティア：令和6年能登半島地震での地域拠点におけるボランティア活動を事例に
Author(s)	頼政, 良太
Citation	災害と共生. 2025, 9(1), p. 23-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103540
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈ケア〉の担い手としての災害ボランティア
— 令和6年能登半島地震での地域拠点におけるボランティア活動を事例に —

Disaster Volunteers as Practitioners of “Care”
— A Case Study of Volunteer Activities at
Local Community Hubs in the 2024 Noto Peninsula Earthquake —

頼政良太¹

Ryota YORIMASA

要約

本稿では、令和6年能登半島地震における地域拠点でのボランティア活動を事例に、一般ボランティアがケア活動の担い手となりうる可能性について考察した。能登半島地震では、災害ボランティアが専門的な支援をおこなう専門ボランティアと一般ボランティアにわけられ、一般ボランティアはケア活動の担い手とはみなされていなかった。ケア活動には「能動態／受動態」の枠組みにとどまる「ケア」と「能動態／中動態」の枠組みでの〈ケア〉がある。〈ケア〉は支援する側が、支援を受け取る側のサインに何とか応答しようとするプロセスの中で生じる。しかし、災害ボランティアは「何ができるか」という問いに囚われ、「支援する／される」という「能動態／受動態」の構図に固定化されてしまい、一般ボランティアが担っている〈ケア〉の役割が不可視化されてしまう。本稿では、物資配布や足湯ボランティアの実践を通して、一般ボランティアが〈ケア〉を提供していることを確認した。そして、被災者との出会いや、一般ボランティアと被災者の継続的な関係性によって「能動態／受動態」の構図が「能動態／中動態」の枠組みへと容易に〈反転〉し得ることを明らかにし、一般ボランティアが被災者の葛藤へと向きあうことによって〈反転〉が作動し、〈ケア〉が生み出されていることを示した。

Abstract

This paper explores the potential role of ordinary disaster volunteers as agents of care, drawing on practices observed at local support hubs following the 2024 Noto Peninsula Earthquake. In this context, volunteers were typically categorized into “specialist volunteers,” who provided expert forms of assistance (For example, volunteers operating heavy machinery, volunteers supporting the operation of evacuation centers, and volunteers providing medical care.) , and “ordinary volunteers,” who were not conventionally recognized as care-givers. The paper distinguishes between two conceptualizations of care: “care” framed within the active/passive voice, and “〈care〉” situated within the active/middle voice. The active voice/middle voice is, for example, in volunteering to help others, one finds oneself being supported and energized in return. The latter arises through a relational process in which those offering support endeavor to respond to the subtle and often ambiguous signals of those receiving it. Yet disaster volunteers are frequently constrained by the normative question, “What can I do as a volunteer?”, a perspective that reinforces an active/passive dichotomy and obscures the ways in which ordinary volunteers are already engaged in 〈care〉. Through analysis of practices such as relief supply distribution and footbath services, this study demonstrates that ordinary volunteers do, in fact, perform 〈care〉. Moreover, it argues that encounters with survivors and the cultivation of sustained relationships enable the fixed structure of active/passive roles to be readily inverted into an active/middle dynamic. This inversion becomes operative when volunteers confront and engage with the survivors’ inner struggles, thereby generating 〈care〉 as a co-produced, situated, and transformative practice.

キーワード: 災害ボランティア、ボランティアによるケア、「能動態／受動態」、「能動態／中動態」

Keywords: disaster volunteers, volunteer care, “active voice/passive voice,” “active voice/middle voice”

1. はじめに

1.1. 研究概要

本研究は、能登半島地震でおこなわれたボランテ

ィア活動を事例に、被災地でおこなわれる一般ボランティアの活動が、「支援する／される」という構図を乗り越えたケア活動であるという点を示すもの

*1 関西学院大学人間福祉学部 助教

Assistant Proffesor、School of Human Welfare Studies、Kwansei Gakuin University

である。能登半島地震では、一般ボランティアと専門ボランティアの分断が生じ、一般ボランティアは活動の自粛を求められ、ケア活動の担い手ともみなされていない。それらの背景には、「ボランティアは何ができるか？」という問いかけが代表するような、「支援する／される」という構図、すなわち「能動体／受動態」の構図が存在している。本研究では、「能動体／受動態」の枠組みと「能動体／中動態」の枠組みの違いを示した上で、改めてケア活動についての検討をおこない、被災地で求められているケア活動が中動態的な活動であることを示す。

さらに、「能動体／受動態」の枠組みが「能動体／中動態」の枠組みに容易に変化する〈反転〉が生じること、そしてその〈反転〉が〈ケア〉につながっていることについて、能登半島地震で被災した石川県七尾市中島町での支援活動の実践をもとに明らかにする。特に支援物資配布の活動と足湯ボランティアの活動、そして、長期で活動するボランティアと被災者の関係の変化に着目して分析をおこなった。例えば、身体との接触を伴う足湯ボランティアは、ボランティアが被災者に足湯という癒しを提供するとともに、被災者が感想を述べたり、学生の将来を心配して話を聞いたりして、一方通行ではない双方向のやり取りが生まれる。つまり、私があなたに共感するという一方通行の共感ではなく、異なる主体間で影響しあう双方向的な共感が生まれており、被災者を癒すとともに、ボランティアも癒されるような関係が構築されているのである。このように一般ボランティアと被災者の関係が「支援する／される」という「能動体／受動態」の枠組みではなく、共に癒されるというような「能動体／中動態」の枠組みへと〈反転〉することによって〈ケア〉が生み出される。すなわち、〈反転〉は容易に起こり専門職でない一般ボランティアにおいても、〈ケア〉を生み出すことが可能なのである。

1. 2. 研究の背景

1. 2. 1 能登半島地震と災害ボランティアの分類

能登半島地震では、災害ボランティアの自粛に注目が集まったことなどから、災害ボランティア活動の初動が遅れた（渥美・頼政・大門，2024）。災害ボランティアの自粛について、さかんにSNS上で発信がなされ、X上では「ボランティア」という語と「迷惑」などの語が同時に発信される傾向があった（宮前，2024）。つまり、災害ボランティアは迷惑をかけてしまうので、自粛せよとの文脈である。

もう少し細かく見ていくと、能登半島地震においては災害ボランティアが専門ボランティアと一般ボランティアに分けられ、一般ボランティアのみが自粛することを求められた（石川県，2024a）。この石川県の発表を見ると、専門ボランティアは自己完結の専門的な支援ができる団体のことであり、専門職に近い存在として認識されている。一般ボランティアはいわゆる災害ボランティアセンターに登録して活動する人のことを指しており、自己完結の出来ないボランティアと読み取ることができる。専門ボランティアの役割として、避難所への支援や被災家屋の保全、在宅被災者の把握が上げられている一方、一般ボランティアの役割は、瓦礫の片付けなどの軽作業が想定されている。つまり、災害時の被災者のケア活動の担い手としては、専門職が想定され一般ボランティアはケア活動の担い手としては認識されていない。また、一般ボランティアの活動も、金沢駅からバスに乗って活動することが想定されており、近隣住民や被災者自身によるケア活動（さらには支援活動も）は想定されていないことが読み取れる。こうした見解は、石川県によるものであるが、それに対して大きな反論や議論が生じたということはなく、社会の抱く災害ボランティアのイメージを表しているということであろう⁽¹⁾。本稿では、表1のように災害ボランティアについて、自己完結で専門職のような活動をする専門ボランティアとそれ以外の専門性を特に有しない一般ボランティアに分けて検討を進めていく。なお、災害時におこなわれるボランティア活動や支援活動のことを表す際には、災害ボランティア活動と表記する。

表 1 専門ボランティアと一般ボランティアの違い（筆者作成）

	専門ボランティア	一般ボランティア
専門性	高い	低い
自粛	求められず	求められた
活動内容	避難所運営や重機を使った家屋の保全など専門性の高い活動	瓦礫の片付け等の軽作業
自己完結	出来る（と思われる）	出来ない（と思われる）
被災者のケア	期待されている	期待されていない

1. 2. 2. 一般ボランティア自粛論と「何ができるか」という問い

こうした一般ボランティア自粛論の背景には、一般ボランティアに対する「迷惑をかけてはいけない」や「役に立つべきである」といった規範意識、そして「何ができるのか」という問いかけが存在している。試しに、ウェブサイトで「災害ボランティアの心構え」と検索してみると、さまざまなマニュアルやまとめサイトが出てくるが、ほとんどのマニュアルに「災害ボランティアができること」や「被災地に迷惑をかけないように」という文言が記載されている。検索上位には、環境省（2020）のマニュアルや日本財団ボランティアセンター（2025）のまとめページ、Yahoo Japan（2022）のまとめページが出てくる⁽²⁾。Yahoo Japanのページには「被災地に迷惑をかけることになるので、しっかりとした準備が必要です」と記載されている。他のマニュアルでも「自己完結」や「ボランティアでできること」が強調されている。裏を返せば、こうしたマニュアルの記述には、想定される読者層（すなわち一般ボランティア）には基本的に自己完結性が期待できない、という考えが込められているとも言える。このような表現（一般ボランティアにはしっかりとした準備が必要であり、それがなければ被災地に迷惑をかける等）がマニュアルにおいて不要であるとまでは言えないが、こうしたマニュアルや指南書を見て災害ボランティア活動に参加する初心者の人々は、やはり、「ボランティアとして何ができるか」という意識を持ってしまうことは否めないだろう。

この「ボランティアは何ができるか」という問いのもとでは、三井（2021）の指摘するように、被災者はあくまでケアを受け取る側であり、災害ボランティア活動をおこなう支援者がケアを提供する側という構図が構築され保存されてしまう。三井は、こうした「支援をする／される」という構図からは見えないものがあると指摘する。その見えないものとは、この構図自体が自己矛盾を抱えているということである。

現実に行われているケア活動の多くは「支援をする／される」という構図に基づいて構想・計画・実施されているため、この構図は確かに一般的なケア活動の説明として事実上機能はしている。だが、そもそも実質的なケアは「どちらか一方（支援者）はひたすらにケアをする側に、もう一方（被災者）はひたすらにケアをされる側に徹する」というものではないため、この「支援をする／される」という構

図を保持してしまうと、この構図では説明できない実質的なケアが困難になる可能性も含まれているのである。災害ボランティア活動にはじめて参加する際に参照したマニュアル、手引書、心構えなどから、知らず知らずのうちにこうした構図に陥ってしまうことは致し方ないと思われるが、どうやってその構図から抜け出すかということが重要である。

さらに、「ボランティアは何ができるか」という問いが、「支援する／される」という構図を固定することで、もう一つ見失われているものがある。それは、一般ボランティアがケア活動の担い手であるということである。災害時に専門職の支援ばかりに偏ってしまうとニーズを捉え切ることができず、支援の「前」と「後」を支えるようなベースの支援も重要である（頼政, 2023）。支援者（例えば、医師）が対象者のニーズを特定し「救う」という従来型の専門職の支援に対して、近年では支援者と患者が共通の目的や治療の方針を設定し、それに向けて共に進んでいく専門職のケアもおこなわれるようになってきた（三井, 2018）。

ところが、災害ボランティアは「何ができるか」という問いのもとでは、「支援する／される」という構図を保存してしまうために、災害時のケア活動は従来型の専門職の支援、つまり専門職が支援し被災者が受け取るという構図に限定されてしまう。このように、「ボランティアは何ができるか」という問いのもとでは、災害時のケア活動自体が矮小化されその担い手が専門職に限定されてしまい、災害ボランティアの一員である一般ボランティアはケア活動の担い手として想定されなくなってしまうのである。

ケア活動の担い手を専門職に限定してしまうことには、ケア活動の受け手をも巻き込みかねないリスクが存在する。岡野（2024）は、家庭内におけるケア活動（いわゆる「母親業」）が女性たちに押し付けられ続けてきた歴史から、ケア活動の担い手の孤立が孕んでいる危険性を指摘した。岡野によれば、「母親業」を押しつけられ続けてきた女性による政治や社会に対する批判の声（岡野はこれを「ケアの倫理」と呼ぶ）は、「要求度の高い理念は引き受けた者が引き受けるべきである」という考え方（岡野はこれを「正義の倫理」と呼ぶ）によって封殺されてきた。ケア活動の担い手は往々にしてそれ以外の活動に割くべき時間や労力を制限されるため、このような封殺の構図が維持されると、ケア活動の担い手と受け手の間の関係は暴力的なものに変容しか

ねない。

災害時のケア活動の担い手である災害ボランティアを「何ができるか」で判断するということは、ケア活動を専門職による支援に限定してしまい、災害ボランティアの一員でもある一般ボランティアが持つケア活動の担い手としての可能性を不可視化してしまう。そして、そのことによってケア活動の担い手は不足し孤立してしまい、結果的に対象者である被災者を傷つけてしまう可能性があるのである。

1. 2. 3. ケアの定義—ケア活動・「ケア」・〈ケア〉

次に、ケア活動の定義について確認し、一般ボランティアのような専門職ではないものがケア活動の担い手となり得ることを見ていこう。

そもそもケア活動とは、対象者の生活の質を向上させることが目的である。ある人に何らかの障害があったとして、それは「活動」を制限したり、「心身機能」を低下させたりするが、より重要なのは社会に対する「参加」である（上田，1983）。生活の質を考えた時に、必ずしも「心身機能」や何ができるかという「活動」だけが問題になるのではなく、その人がどのような社会的関係を持ち、何に参加できるのか、ということが重要となる。生活の質の改善が求められる対象者が参加していく社会は、当然のことながら専門職のみによって構成されているわけではない。このことから、専門職のみがケア活動の担い手としての特権的地位にあるわけではないのは明確である。

また、ケアという行為は一方が与え、他方が受け取るという構図で生じる。健常者と障害者、年長者と年少者など、非対称な構図があるが故にケアの必要性が生じるのである。しかし、非対称性があるからといって「支援する／される」という構図が固定化されてしまえば十分なケアをおこなうことはできず、「支援する／される」構図を揺るがしていくことが重要になる。トロント（2013）によれば、ケアには、1.注視(attentioness)—関心を向ける(caring about) 2.責任(responsibility)—配慮すること(caring for) 3.能力(competence)—ケアを与える(care giving) 4.応答(responsiveness)—ケアを受け取る(care receiving)の4つのプロセスに加え、5つめのプロセスとして、5.複数性、コミュニケーション、信頼、敬意—共にケアする(caring with)という5つのプロセスがある。この5つ目のプロセスは、「支援する／される」という構図を揺るがした先にあるのである。

そこで、本稿では表2のように、相手を癒そうとす

る行為そのものをケア活動とし、従来型の専門職による支援のような「支援する／される」構図を保存したままのケア活動を「ケア」、「支援する／される」という構図を乗り越えたケア活動を〈ケア〉とわけて検討を進めていく。

表 2 ケア活動と「ケア」、〈ケア〉の定義（筆者作成）

ケア活動	対象者の生活の質を向上させ、対象者を癒そうとする行為一般。制限された「活動」や低下した「心身機能」の回復のみならず、社会に対する「参加」の確保ができるかどうか鍵となる。
「ケア」	従来型の専門職による支援に代表されるようなケア活動。「支援する／される」という構図から脱していない。
〈ケア〉	専門職に限らず行われるケア活動。「支援する／される」という構図を乗り越えたケア活動。

1. 3. 研究の目的

ここまで見てきたように、災害ボランティアを「何ができるか」という視点で見ること、専門ボランティアと一般ボランティアを分断してしまい、被災地での支援活動が十分におこなわれていない状況を生み出している。

令和6年能登半島地震において、専門ボランティアである支援団体は、被災地で行政の手が回らないところまで支援するなど、非常に重要な役割を果たしていたが、本来の専門性を発揮しにくい環境が生まれていた。例えば、珠洲市では残念ながら、警察や消防の重機はほとんど活用されなかったため、被災地に物資を運ぶための重要な道路の瓦礫を片付け、生活道路を確保するという道路啓開の役割はボランティア団体が担っていた（川村，2024）。他にも、避難所で炊き出しをおこなう支援団体や、在宅にいる被災者向けに支援物資を配布するなど、被災地の人々を支えていた。しかし、炊き出しをおこなっていた団体の中には、普段であれば重機を使って瓦礫の片付けをおこなう団体も含まれていた。被災地では、食事も提供されていない避難所が多くあったため、本来の専門である瓦礫撤去の活動ではなく、炊き出しの活動をせざるを得なかったのである。また、物資配布などは一般ボランティアと一緒に協力することで多くの被災者に支援ができるのだが、今回は

専門ボランティアのみの活動になったために、通常の災害時よりもできる活動が限定的になってしまった(頼政, 2024a)。このように、一般ボランティアの制限によって専門ボランティアの活動も停滞してしまったのである。

同じように、被災者へのケア活動という面でも、一般ボランティアが担っていたケア活動の役割を不可視化し、担い手として見られていない状況が生まれている。つまり一般ボランティアの役割を矮小化し、結果的に被災地での〈ケア〉を不十分にしているのではないだろうか。

そこで本研究では、特に被災地でおこなわれる一般ボランティアによる活動に着目し、一般ボランティアが〈ケア〉の担い手となることを明らかにすることを目的とする。一般ボランティアと被災者の関係は、「支援する／される」という「能動態／受動態」の枠組みから始まることも多いが、活動をおこなうなかで「能動態／中動態」の枠組みへと簡単に〈反転〉すること、そして、その〈反転〉が生じることによって、〈ケア〉が生み出されていることを示し、一般ボランティアによる活動が〈ケア〉活動になり得ることを明らかにする。

1. 4. 本論文の構成

本論文は、全7章で構成されている。第1章ではここまでみてきた通り、専門ボランティアと一般ボランティアの定義とケア活動の定義を定め、一般ボランティアがケア活動から疎外されていることを確認した。第2章では「能動態／受動態」の枠組みと「能動態／中動態」の枠組みの違いを示した上で、改めてケア活動についての検討をおこない、「ケア」と〈ケア〉の違いや〈ケア〉が中動態的な活動であることを示す。第3章では、「能動態／中動態」の枠組みが「能動態／中動態」の枠組みに容易に変化しうる可能性について明らかにする。第4章では、研究方法と研究フィールドについて紹介する。第5章、第6章は、能登半島地震の被災地内でおこなわれた一般ボランティア活動の事例検討である。専門職ではない一般ボランティアが〈ケア〉を提供していることを確認する。第7章は考察部分である。一般ボランティアと被災者の関係が、「能動態／受動態」の枠組みではなく、「能動態／中動態」の枠組みへと〈反転〉することによって〈ケア〉が生み出されていること、〈反転〉は容易に起こり専門職でない一般ボランティアにおいても、〈ケア〉を生み出すことが可能であることを示す。

2. ケア活動と中動態

2. 1. 「能動態／受動態」と「能動態／中動態」

まず、ボランティアは「何ができるか」という問いが持つ問題について、「能動態／受動態」と「能動態／中動態」という枠組みを用いて検討する。ボランティアは「何ができるか」という問いは、「支援する／される」という構図であり、「能動態／受動態」という構図でもある。渥美(2019)は、より秩序だって行動するボランティアを促進する動向である「秩序化のドライブ」によって、この「能動態／受動態」の状態が固定化されてしまうため、臨機応変なボランティアを促進し、被災者を中心にして課題の解決を図る「遊動化のドライブ」によって「能動態／中動態」の関係へと変化することが重要であると指摘する。つまり、ボランティアのケア活動は「支援する／される」という枠組みである「能動態／受動態」という枠組みではなく「能動態／中動態」という枠組みで考えていく必要がある。

表 3 「能動態／受動態」と「能動態／中動態」の違い(松原(2020)をもとに筆者作成)

「能動態／受動態」の枠組み	能動態	ある動作・作用について述べるとき、その動作・作用の主体を主語に立てた場合に、その述語の動詞がとる形式
	受動態	他からの動作・作用を受ける対象を主語に立てた場合に、その述語の動詞がとる形式
「能動態／中動態」の枠組み	能動態	主語から出発して主語の外で完遂する過程であることを表す動詞の形式
	中動態	主語が過程の内部にあることを表す動詞の形式

ここでは「能動態／受動態」の枠組みと「能動態／中動態」の枠組みについて改めて整理しておこう。通常、動詞は「能動態／受動態」、言い換えれば「する／される」という区別がなされるが、古代ギリシア語には中動態という態の区別があった。中動態を能動態と受動態の中間と理解するのは誤りで、中動態は独自の表現機能を持ち、それは「する／される」とは別の表現である。國分(2017)によれば、古代ギリシア語においては能動態と中動態が対となっており、その対比は行為の「外／内」の違いである。松原(2020)による整理が明快であるため、その概要を表3にまとめた。松原は、「能動態／受動態」

の枠組みではうまく説明し得ない行為である避難行動を「能動態／中動態」をもとに詳細に分析し、中動性を導入することで、人と人とが関われる関係の可能性の集合である「関わりしろ」が増えると指摘する。松原はまた、中動態の概念を導入するにあたって、「能動態／中動態」という枠組みを明示しなければ、能動態でも受動態でもないものを中動態とするという曖昧な理解に終わってしまうと指摘する。そこで、本稿でも以降は松原にならない、「能動態／中動態」の枠組みを用いながら検討を進めていく。

2.2. ケア活動の非対称性

次に、ケア活動の持つ中動性について検討している。前述したようにケア活動には非対称性が存在している。たとえば、岡野（2024）はケア活動において、支援者と支援を受け取る側の能力の差が大きく非対称な関係となり、支援を受ける者が暴力にさらされ弱い立場に置かれる可能性があると指摘する。また、災害時に救援者が被災者を支配する可能性があることは、古くから指摘されている（e.g. 野田，1995）。このような非対称性は、「支援する／される」という構図である「能動態／受動態」という枠組みの中で固定化されてしまう。むしろ、非対称な関係から始まった関係をどう揺るがしていくかということがケア活動の実践の中では課題となる。

ケア活動においては、「支援する／される」関係から脱却できなければ、非対称性が肯定されてしまい、支配関係を生み出してしまふ。それらは「支援する／される」構図を保存した「ケア」にしかならず、当事者同士が対等とあろうとしても、その非対称性は回避できない。例えば、モル（2020）は、患者の自由な選択が尊重され治療方針を選ばされる「選択のロジック」ではなく、医師や看護師、家族との関係の中で治療を調整していく「ケアのロジック」が重要であると指摘している。「選択のロジック」が医療者の責任を回避する手段として用いられるのに対して、「ケアのロジック」はむしろ積極的に責任を果たそうとする態度である。「選択のロジック」においては、医師のもとで患者が治療を選ばされている、つまり「能動態／受動態」の関係から脱却できていないのに対して、「ケアのロジック」では相互に意見交換しながら治療を調整していく。つまり、「ケアのロジック」においてはそれぞれが行為に主体的に関わる態度を持っている「能動態／中動態」の枠組みでケア活動が捉えられているのである。また、「選択のロジック」においては、医師と

患者という2者関係に焦点があたっているが、「ケアのロジック」においては医師と患者だけではなく、それを取り巻く看護師や家族を射程にとらえられている。

このように見ていくと、「能動態／受動態」の枠組みである「支援する／支援される」という関係の中でおこなわれるケア活動は、非対称性が生じる「ケア」であり、不十分なケア活動であると言えるだろう。

2.3. 〈ケア〉が生まれるとき

では、非対称性が生じるような「ケア」ではない〈ケア〉が生まれるのはどのような時なのだろうか。前述した通り、ケア活動には5つのプロセスがあり、最終的には相互のコミュニケーションが可能となるに至る。竹端（2023）は、相手を理解し、信頼していくプロセスが〈ケア〉であり、このプロセスを通してお互いを思いやることが可能となり、連帯感が生まれると指摘する。

次に、連帯を深めるプロセスとは何かを確認しよう。それは、ケア活動において支援する側と支援される側の相互が触発し合い、互いに何らかのサインを受け取る場である〈出会いの場〉が開かれた時である（村上，2021）。つまり、〈ケア〉は一方通行のサインではなく相互のコミュニケーションによって成り立つものなのである。〈ケア〉を成り立たせるには、相手を検査対象としてみるような事務的な声かけではなく、〈出会いの場〉を開こうとするような声かけが必要である。村上によれば、それは相手からのサインを受け取るということに徹するというよりは、自らの気持ちを告白するような声かけであるという。このような相互のコミュニケーションによる〈出会いの場〉により〈ケア〉が開かれるということは、支援するものが一方的に支援を受け取るものへ発するコミュニケーションではなく、相互がコミュニケーションという行為の内側にいることが確認できた際にケア活動が始まるということである。それはつまり、「能動態／中動態」の枠組みで行為をとらえたときに〈ケア〉が生じるということである。

岡野（2024）も、〈ケア〉がニーズを持つ人への応答から始まり、〈ケア〉の実践を通して〈わたしたち〉を形成すると指摘する。つまり、〈ケア〉とは相手への応答を通じて何らかのケア活動を提供し、コミュニケーションを図ることでお互いの連帯を深めていくプロセスであると言える。災害ボランティ

アにおいては、足湯ボランティアが〈ケア〉の好例であり、被災者とボランティアの連帯が生まれている活動と言える。似田貝（2015）によれば、足湯ボランティアは、第一次的なケア活動である。被災者が全くの他者であり、かつ非専門職のボランティアに向かって心の問題をつぶやき、それが受け止められることによって〈ケア〉が生み出されている。足湯ボランティアの主目的はもともと傾聴ではなく足湯によって被災者の心身の緊張をほぐすことにあるが、そのプロセスを通じて被災者の気持ちが和らぎ、被災者が心の問題を語りはじめるという自然体での傾聴——「寄り添う」行為——が結果として実現しているのである（吉椿, 2015）。それは、中井（2011）の指摘するような、傍にいてだけでピアサポートになると言えるものでもある。

こうした〈ケア〉が生まれる瞬間は、被災者のサインに何とか応えようとするボランティアの応答があり、それが中動的な責任を生成している。國分（2021）によれば、「能動態／受動態」の枠組みの中では、意志を契機として責任が生成するのに対して、「能動態／中動態」においては、目の前の応答において責任が生成する。そう考えると、目の前の人の何らかのサインに何とか反応しようとする〈ケア〉は、積極的に責任を取ろうとする営みであり、中動性を帯びている活動であるのだ。改めて整理してみると、「ケア」は「能動態／受動態」の枠組みにとどまっているケア活動であり、〈ケア〉は「能動態／中動態」の枠組みでのケア活動と言える。

〈ケア〉が生まれるのは相手との何らかのコミュニケーションを通じて、相手のサインを受け取り応答しようとする時であり、「能動態／受動態」の枠組みから「能動態／中動態」の枠組みへ移る時であることがわかった。しかし、1.1節で触れたように一般ボランティアは「能動態／受動態」の枠組みに固定化されてしまっており、この枠組みから抜け出せなければ、〈ケア〉の担い手として活動することは難しい。どのようにすれば「能動態／受動態」の枠組みから抜け出すことができるのだろうか。一般ボランティア活動の中で、「能動態／受動態」の枠組みからどうやって抜け出していけるのかを検討することで、ボランティアの果たす〈ケア〉の可能性を見出していくことができる。

3. 中動態への〈反転〉

3.1. 「反転」と〈反転〉

本章では、「能動態／受動態」の構図がどのよう

に無効化されていくのかを検討していこう。まずは議論を整理するため、矢守（2019）が中動態に関する議論に導入した「反転」の概念とそれを整理した頼政（2024b）による〈反転〉という2つの概念を用いることにする。矢守は「能動態／受動態」の関係は、徹底して受動性を進めていくことで反転し得ると指摘する。この反転とは、例えばボランティア活動の場面でよく聞かれる「助けるつもりが助けられた」、「元気を与えるつもりが逆に元気をもらった」という現象のことである。では、どのように反転し得るのか。徹底的な受動性を有している状態とは、他者による支援が必要不可欠である状態であると言える。支援が必要不可欠な状態にある人を目の前にすると何か支援をしなければならないと感じるだろう。そういった意味で、徹底的な受動性は他者による支援という能動性を強く引き出す効果を持っており、徹底的な受動性が積極的に他者の支援を誘発しているという意味で能動と受動が反転している。このプロセスを昇華させていくこと、つまり受動性をより高めるために、能動と受動の関係をよりはっきりと徹底させることで、能動と受動の関係に亀裂が入り、どちらが能動でどちらが受動であるかが曖昧な、つまり中動的な行為へと変換されていく可能性を持っていると指摘する。能動／受動の関係を抑制・減退させようとする動きはむしろ能動／受動の枠組みに囚われており逆効果であり、能動／受動の関係をより加速させていく方がかえって中動態の関係が開けてくるというのが矢守の主張である。矢守は「能動態／受動態」の関係を抑制・減退させようとする方策を「反転」と呼んだ。「反転」は、能動／受動の関係を文字通り引っくり返そうとする試みである。通常は研究対象とされる当事者が、自身を研究対象として積極的に考察を深めていく当事者研究などがこれに当てはまるだろう。「反転」は、依然として「能動態／受動態」の枠組みを維持しており、能動態と受動態の構図をひっくり返している状態である。それに対して矢守は、徹底的な受動性により「能動態／受動態」の構図そのものを曖昧にする反転があると主張する。頼政（2024b）は、この2つの反転を「反転」と〈反転〉として表4のように整理している。

「反転」が「能動態／受動態」の構図を依然として保持し、文字通り構図をひっくり返しているのに対して、〈反転〉は意図せず発生していくことから「能動態／受動態」を構図ごと破壊し、どちらが能動なのか受動なのかという問い自身を無効化し得る

頼政：〈ケア〉の担い手としての災害ボランティア

可能性を秘めている。つまり、〈反転〉は単に能動態と受動態の関係をひっくり返すのではなく、「能動態／受動態」の構図から抜け出し「能動態／中動態」の構図へと至るという点で違いがある。

表 4 「反転」と〈反転〉の違い（矢守（2019），頼政（2024b）をもとに筆者作成）

「反転」	「能動態／受動態」の関係を反転させる。依然として「能動態／受動態」の構図を保持。
〈反転〉	「能動態／受動態」の関係を強化することで意図せず関係が反転する。「能動態／受動態」の関係を構図ごと破壊。

3. 2. 〈反転〉の条件

次に〈反転〉はどのようにして起こるのかという点について検討してみよう。矢守は、徹底的な受動性により徹底的な能動性を引き出し、「能動態／受動態」の関係を破壊するとしている。しかし、徹底的な受動性のみが「能動態／受動態」の構図を破壊するのだろうか。頼政は、徹底的な受動性だけではなく、もっと簡単に〈反転〉が起こりうる」と指摘する。頼政によると〈反転〉が起こり得るのは、4つのパターンがあり得る。第一に、当事者との出会いによる〈反転〉である。被災者を目の前にした時に、支援者であるとか、この人は被災者であるという認識の前に思わず体が動くというものである。第二に、ボランティア同士での交流によって起こる〈反転〉である。災害ボランティア同士の出会いや、災害ボランティアによるゆるやかなネットワークが形成されることによって、多様な災害ボランティアのあり方が認識されるのである。第三に環境である。災害ボランティアや被災者が、自らの主体性が尊重され、自らの能力が発揮できる環境に置かれることによって、自然と〈反転〉は生み出されていく。そして第四に、時間の射程による〈反転〉がある。長い生活再建のプロセスとなる復興においては、ボランティアも生活者の一部となりおのずと復興という行為のプロセスの内側に巻き込まれていき、〈反転〉することになる。

第三の〈反転〉は先述したベースの支援においても重要である。頼政（2023）は、多様な肩書きの人々が関わり、その「想い」を実現させることのできる〈場〉が形成され、その〈場〉に主体的に参加する

ことによって、支援をする／されるという「能動態／受動態」の枠組みから、「能動態／中動態」の枠組みへと変化することによって、ベースの支援が実現すると指摘する。ここでの〈場〉とは、現場の人がそこにあると感じていて〈場〉としか呼びようがない複数主体の関係性のことであり、その〈場〉によって多様な関係性が育まれているものである（三井，2021）。

このように、「能動態／受動態」の構図を破壊する〈反転〉は、徹底的な受動性によって徹底的な能動性を引き出すような極限に至らなくとも、被災者との出会いやボランティア同士の交流によって起きている。つまり、「能動態／受動態」の構図は容易に変化し得るものである。

次章以降、能登半島地震での被災地でおこなわれた災害ボランティア活動の現場で、〈反転〉が容易に起きていることを見ていこう。特に、第一、第三、第四の〈反転〉が顕著にみられたことが特徴である。

4. 研究の方法と対象

4. 1. 研究方法

本研究は、令和6年能登半島地震で大きな被害を受けた七尾市中島町に拠点を構えた被災地NGO協働センターの活動を対象としている。筆者は支援団体の職員として、2024年1月11日から被害の大きかった石川県七尾市中島町を拠点に支援活動を開始した。活動期間は、2024年1月11日～2025年5月5日までの延べ143日である。主に被災者の家での片付け、避難所環境整備、物資配布、法律相談、足湯ボランティアなどをおこなった。さらに、外部支援団体との交渉や、行政との会議への参加、地元団体との協議など、支援団体の責任者としての活動もおこなっている。これらの支援活動は、筆者が被災地NGO協働センターのスタッフやボランティアとともにおこなった協同的实践であり、研究者として現場の改善を目指すベターメントに念頭を置いたアクションリサーチである。また、同時に筆者が支援者としておこなった活動でもある。本稿は、このアクションリサーチを通じて作成したフィールドノーツや撮影写真などの記録をもとに、被災者とボランティアとの関係の変化を示す出来事を抽出し分析したものである。

さらに、被災地NGO協働センターの設置した拠点で長く活動している学生アルバイトスタッフのNさんにオンライン会議システムを用いて半構造化面接形式でインタビューをおこなった。インタビューの詳細は第6章で示す。

4. 2. 石川県七尾市の概要と能登半島地震での被害

次に、石川県七尾市の概要と能登半島地震での被害について整理する。石川県七尾市は、石川県の北部、能登半島の中央に位置（図1）しており、2004年に七尾市、田鶴浜町、能登島町、中島町の1市3町が合併して現在の七尾市となった。2024年9月末現在、人口46,804人、21,315世帯が暮らしている（七尾市、2025）。

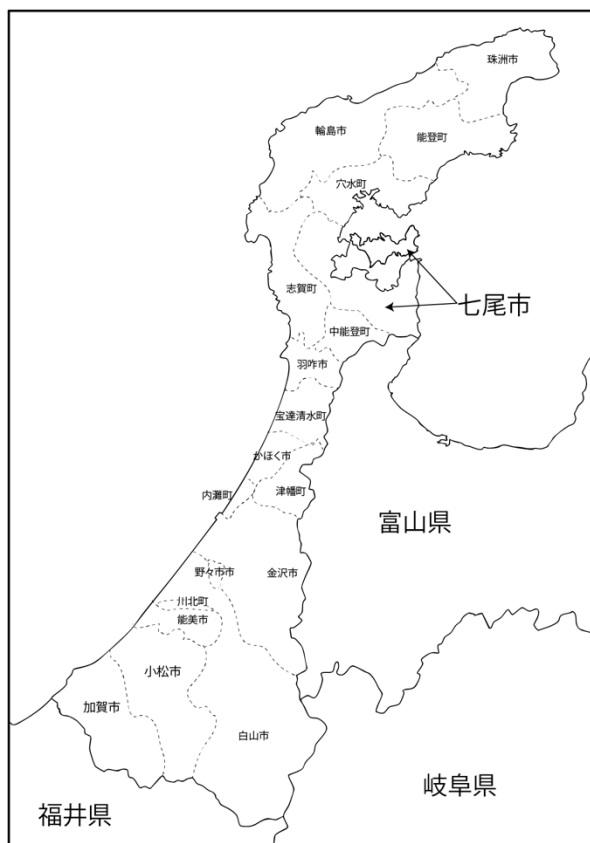


図 1 石川県の地図（筆者作成）

筆者らが拠点を置き活動している七尾市中島町は、2004年に七尾市に合併したエリア（図2）で、西岸地区、鉾打地区、熊木地区、中島地区、豊川地区、笠師保地区の6つの地区に大きく分かれており、それぞれの地区がさらに細かな集落に分かれている。地元住民は集落のことを在所と呼んでいるため、以降は集落のことを在所と表記する。筆者らが拠点を置いて活動しているのは、西岸地区内に位置する小牧在所である。元々は6つの地区それぞれに小学校が設置されていたが、現在は人口減少等により、中島地区の中島小学校のみ開校しており、残りの小学校は閉校している。一部の小学校跡地は、地域のコミュニティセンターなどとして活用されている。中島町の現在の人口は4,646人、2,015世帯で、七尾市の中でも

周辺部にあたり人口も少ないエリアである（七尾市、2025）。

令和6年能登半島地震では、七尾市でも大きな被害を受けた。最大震度6強を観測し、全壊392棟、半壊3,077棟、一部損壊12,153棟（2024年8月21日現在）の大きな被害が出た（石川県、2024b）。中島町での被害件数はまとめられていないが、大きな被害が出ている（高尾、2024）。筆者が2024年1月に地域を回ってみたところ、被害は半壊や一部損壊が多く、屋根の被害による雨漏りなども見られた。その後も、筆者は継続して被災地に通り被害を受けた地域を回っているが、度重なる余震によって徐々に被害が拡大した家もあり、筆者らの拠点近くの倉庫も、余震の影響を受け、8月に突如倒壊するということがあった。海に面した場所では、一部津波が到達したところもあり、牡蠣養殖小屋などでも被害が出ている。

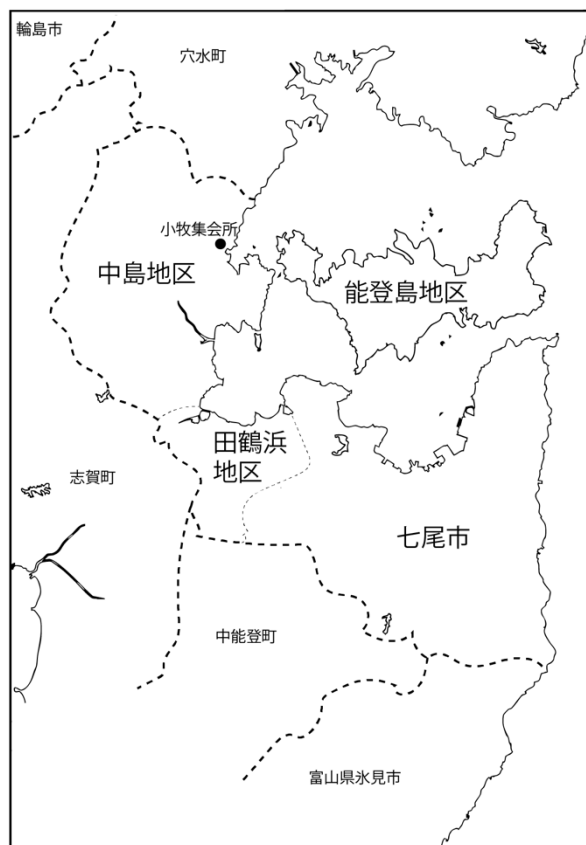


図 1 七尾市の地図（筆者作成）

4. 3. 小牧在所と被災地NGO協働センター

4. 3. 1. 地震発生前の関係

被災地NGO協働センターでは、2007年に発生した能登半島地震でもボランティア活動をおこなっており、災害発生直後から輪島市や穴水町の避難所を訪問し、学生ボランティアと共に足湯ボランティアを

頼政：〈ケア〉の担い手としての災害ボランティア

提供していた。その後は、各地の仮設住宅でも足湯ボランティアを提供している。筆者も学生ボランティアの一員として仮設住宅での活動に参加していた。学生ボランティアたちは、複数の大学から集まって中越・KOB足湯隊を結成し活動をおこない、その活動資金等の管理の事務局を被災地NGO協働センターがおこなっていた。さらに、2008年には被災地NGO協働センターも加盟している震災がつなぐ全国ネットワークが「いとしの能登よみがえれ」という写真集を出版した。この写真集を購入した住民から誘われたことをきっかけに、2009年から被災地NGO協働センターは、毎年必ず祭りに参加するようになった。祭りを取り仕切る小牧壮年団が中心となって、大学生を含む外部の担い手を受け入れている。筆者は第1回目の2009年から参加している。

このような祭りでの交流に加えて、慰安旅行として小牧壮年団が神戸に訪問する機会が三度ほどあった。被災地NGO協働センターの事務所で交流会を開催するなど、両者は親密な関係を築いてきた。さらに、毎年のように発生する自然災害に対して、支援活動のためのカンパを在所内で集め、被災地NGO協働センターに寄付を送るという関係もあった。このように、非常に親密な関係を15年間継続してきた被災地NGO協働センターと七尾市中島町小牧在所は、強いつながりを持っていた。

4.3.2. 地震後の支援活動

被災地NGO協働センターでは、2024年1月1日から小牧在所の住民と連絡を取りあい、現地の状況の把握をはじめた。地震発生後、小牧在所の住民は高台に避難し電気もない状態であったので、テレビ等から入手できる情報をLINEで送るという形でサポートを開始した。翌1月2日には、支援物資を車に載せ第1陣が神戸を出発した。昼過ぎに出発したものの渋滞の影響で、通常であれば6時間ほどで到着するところ、8時間ほどかけて21時ごろに小牧在所に到着し、物資等を届けた。その後、第2陣が1月5日に支援に入り、筆者自身は1月11日に現地に入り支援を開始した。地震発生後、筆者らが支援していた避難所である中島町コミュニティセンターでは、行政からの支援物資が届くまでにかなり時間がかかっていた。さらに、避難所に行かず自宅で暮らす住民の状況についても、小牧壮年団ら地元住民を通じて知ることができ、1月中旬の段階で支援物資が届いていないことがわかってきた。七尾市役所では支援物資の配布が1月16日から水のみ、かつ1世帯1箱の制限がつく日も多くなり、

支援物資の配布がないという日も増えていった（七尾市，2024a・七尾市,2024b）。

表 5 被災地NGO協働センターの活動（筆者作成）

活動	内容
避難所環境整備	1月から環境整備を進める。3月の避難所統合では七尾市に協力。
片付け／清掃	1月から活動開始。災害ボランティアセンターとは別に、独自にボランティアを集め活動。
足湯ボランティア	1月末から開始。「やさしや足湯隊」を結成し、学生を中心に活動。
物資配布／居場所づくり	2月3日からスタート。拠点を構えて物資を配布。
情報発信	2月からLINE公式アカウントを活用して情報を発信。
炊き出し	2月以降、拠点での炊き出しを受け入れ（不定期開催）。
仮設住宅支援	3月から、仮設住宅の引越し、個別訪問、サロン活動等を実施。
相談対応・相談会	個別の相談のほか、弁護士会等と連携し、相談会を開催。
イベント・行事への参加	地域を盛り上げるためのイベント（マルシェ、花火大会など）の応援や、草刈り等への参加、地元行事（祭り等）の応援を実施。

そこで、まずは物資支援をおこなうための拠点が必要となった。筆者らが被災地の外から車で運ぶ物資には限りがあるが、外部から支援物資を送ってもらう物資集積所を設置しストックすることで、たくさんの物資を届けることが出来る。そのための物資の集積拠点が必要であったため、小牧在所の町会長に集会所を借用できないか打診したところ、二つ返事でOKをもらうことができた。町会長は、「よくわからない団体であつたら貸していないけれど、これまでの積み重ねがあるから」と話していた。集会所は、地震によって窓ガラスが割れたり、棚が倒れたりしており、清掃しなければ使えない状態であったため、駆けつけた外部ボランティアと共に片付けをおこなったが、その際に小牧壮年団の住民も片付けに参加してくれた。在所に住むSさんも「被災地NGO協働センターは在所の一員と同じ」と話しながら手伝ってくれた。このように、過去からの継続したつながりによって、小牧在所の住民と被災地NGO協働センターの関係は、「支援する／される」という関

係ではなく、集落の一員同士という関係となっていたのである。こうして集会所を拠点としながら、物資配布以外にも避難所環境改善や家の片付け等、さまざまな活動を展開していった。これまでの活動内容については、表5の通りである。

5. 被災者への〈ケア〉の提供

5. 1. 物資配布による〈ケア〉

能登半島地震の被災地では、さまざまな活動がおこなわれていたが、多くの活動が被災者への〈ケア〉の提供につながっていた。すべての活動を紹介することは難しいが、まずは物資配布活動から見ていこう。物資配布活動は、通常、支援者が被災者へと物資を渡す一方向の活動であり、相互のコミュニケーションにより「能動態／受動態」の枠組みから抜け出すような〈ケア〉の活動とは言えないだろう。しかし、こうした一見、〈ケア〉とは言えない活動の中にも、〈ケア〉へと至る回路があるのである。

被災地NGO協働センターの物資配布活動は、2月3日から拠点でスタートし、延べ4500人以上が利用している。主に在宅被災者を対象に拠点まで物資をとり来てもらう形で実施した。先にも述べた通り、七尾市では物資配布が早期に縮小したため、被災した人たちに必要な物なるべく揃えていくように努力し、多様な物資を配布していた。物資を取りに来た人の中には、「こんなにもらっていいのですか?」、「今まで何ももらえなかったので本当に助かる」と言いながら涙を流す人もおり、ピーク時には1日100人以上が利用することもあった。

その後、4月ごろからは断水が解消された地区も増えていき、物資配布には少し落ち着きが出てきた。物資置き場の奥には、写真1のようにカフェスペースを設置し、ボランティアや地元住民同士が話ができるようなスペースを設置していたのであるが、そこで物資を取りにきたついでに、お茶やコーヒーを飲みながら話をしつと過ぐすという人も増えてきた。

災害直後は、とにかく必要な物資を求めている人も多く、じっくりと話を聞く機会も少なかったのだが、カフェスペースを設置したことで、さまざまな話を聞くことができるようになった。災害直後は必要な物資や足りていない物資に関わる話や、大変な状況についての話、片付けを頼みたいという話などが多かったが、徐々に罹災証明書や公費解体といった支援制度に関わる相談が多くなっていった。例えば、「半壊認定になったけど、もっと被害が大きい



写真 1 物資置き場のカフェスペースの様子 (2025年3月16日：被災地NGO協働センター撮影)

はず。どうしたらいいのか」、「市役所に行ったら罹災証明の再審査をすると低い判定になる可能性がある」と3回も言われて、どうしようと思っていたの」、「災害ゴミを捨てに行ったけど、分別してないと言って追い返された」といった相談事である。細かな制度の話や、この先の生活を立て直すための不安など、少し先の将来の不安について話す人が多くなっていった。

こうして、支援物資の配布の活動は、災害直後の必要物資を届けるという活動から、徐々に被災者の声を聞く、被災した人が落ち着いて過ごせる空間を提供するという役割へと変化していき、緊急援助から被災者の居場所を作る活動へと変わっていったのである。

筆者が2024年5月に能登半島を訪れた際に、居場所づくりへと変化していったことを象徴するようなやりとりがあったため、紹介したい。物資配布をおこなっている場所で下記のような話をしていた人がいた。

「5月末で災害ゴミ置き場が開まります。こちらで息抜きしていることで少しずつ動き出しています (2024年5月15日)」

「こちらに来ることで落ち込むことが激減しました (2024年5月17日)」

「ここに来ることで別の世界に行ける場所があることで、心の拠り所となっています。(中略) গত গতを忘れてしまいたい。吐口がない (2024年5月17日)」

このように、当初は物資をもらうことを目的とし

頼政：〈ケア〉の担い手としての災害ボランティア

ていた活動ではあったのだが、途中から物資をきっかけとしてボランティアと話をすることが被災者の心の拠り所となっていたことがわかる。被災者に物資を渡すというだけでなく、被災者の居場所となり心の拠り所になるという意味で〈ケア〉が生まれる場となっていたのである。

物資配布の場に集まる人たちは、単にお茶を飲みに来るというわけではなく、物資配布の手伝いをしたり、差し入れを持ってきてくれたり、自発的に手伝ってくれる人ばかりであった。単に「ケア」を受けるだけではなく、被災者である自分たちでもできることをする場となっていたのである。さらに、このカフェスペースを使ってさまざまなボランティア活動が可能となっている。例えば、マッサージ、音楽の演奏、子どもたちの遊び企画などである。これらの活動は、ボランティアが企画する場合も多いものの、被災者が企画に携わったり、主体的な取り組みをしたりしている。2025年6月からは、毎月1回の月替わりマルシェとして、被災者や地域住民が小さなブースで料理や小物を販売するというイベントもおこなわれるようになり、ボランティアが客としてイベントに参加している。こうしたイベントの中では、被災者は単に「ケア」を受け取るという存在ではなく、活動する主体となっている。

このように、被災地NGO協働センターの物資配布活動は、カフェスペースを設置し、被災者の主体的な取り組みを促している点で、第三の反転が生み出される〈場〉を形成する活動であったと言えるだろう。物資をもらうという受動的な立場であった被災者が、その〈場〉に参加することで、主体的に「想い」を表現することが可能になり、「能動態／受動態」の枠組みから「能動態／中動態」の枠組みへと変化する〈ケア〉へと至っているのである。

5. 2. 足湯ボランティアによる〈ケア〉

被災者の〈ケア〉という意味では、足湯ボランティアの活動も特徴的である。実際に能登半島地震の被災地では、「若い子とお話できて嬉しい」、「にぎやかさが嬉しい」、「また会えて嬉しい」、「集まりがあるのが嬉しい」といったポジティブな足湯のつぶやきも見られた。こうしたポジティブな足湯のつぶやきは、その多くがボランティアと被災者の出会いによって喚起されたものであり、〈ケア〉の入り口となる被災者との出会いを提供するものである（頼政、2025）。

筆者も足湯隊の一員として、2025年2月12～14日に

おこなわれた仮設住宅や避難所で足湯ボランティアの活動に参加した。2月13日は珠洲市の仮設住宅2ヶ所で活動をおこない、2月14日は輪島市の仮設住宅と避難所で活動をおこなった。どの場所でも、足湯ボランティアがやってくるのをとても楽しみにしてくれていた。

はじめに行った珠洲市の仮設住宅集会所では、足湯の準備中から2人の女性が待っていて話を聞いた。2月の前半に大雪が降った影響で、ボランティア活動があまりおこなわれておらず、久々の集会所でのイベントであったそうだ。「ボランティアはたまに来る」、「足湯は以前もやって楽しみにしていた」、「若い人と会うと元気が出る」とも話していた。ボランティアがいなければ、集会所での催しもあまりなく、人と会う機会もないということであった。集まった住民の中には、同じ仮設住宅に住んでいるけれど久々に会う、という人もおり、お互いの今後の再建について話をしたり、近況報告をしたりする住民もいた。集まってくれた住民は、足湯ボランティアの若い学生たちと話すのが楽しそうに見えた。

翌日に訪れた輪島市の仮設住宅では地域住民が集会所を定期的に使用しているということで、到着した時にはすでにたくさんの人が集会所の中でくつろいでいた。非常に元気な人が多く、学生と話すのを楽しんでいた。仮設住宅に入居した時期と比べると、ボランティア等のイベントは減っているようで、帰り際には「またきてほしい、楽しみにしている」という話す人もいた。午後に訪問した輪島市内の避難所では、5～6名の住民が足湯ボランティアを楽しんでくれた。最初は、無口な様子であった男性も、足湯ボランティアをするうちに饒舌になり、ボランティアの学生へ餅を焼いて持ってきてくれたり、帰る際には入口まで見送りにきてくれたりして、交流を深めることができた。

このように、物資配布や足湯ボランティアなど、さまざまな活動を通じて、被災者への〈ケア〉が行われていたのである。こうしたケア活動は、被災者とボランティアとの関係を、「支援する／される」という「能動態／受動態」という構図から、「能動態／中動態」という構図へと変化させていく。例えば、足湯ボランティアの活動の中では、ボランティアと被災者という関係ではない1対1の関係性が構築されていく様子が見受けられた。ボランティアが何かをしてあげようとするのではなく、もちろん足湯ボランティアは提供するのだが、それに対して集ま

った住民も感謝を述べながら、ボランティアの学生の将来を心配して話を聞いたり、土産を渡したり、一緒に卓球をして楽しんだりする様子が見られ、一方通行ではない双方向のやり取りが見られた。こうしたやり取りは、まさにボランティアと被災者の出会いによる第一の〈反転〉である。この〈反転〉によって、被災者が〈ケア〉され、ボランティアと被災者という構図が崩されていくことになる。

6. ボランティアと被災者の関係性の变化

6. 1. ボランティアさんからNちゃんへ

では、実際にボランティアと被災者の関係がどのように変化しているのかを検討してみよう。まずは長期にわたって活動していたNさんの活動から検討する。なお、特に断りがない限り、6.1節の「」で括っている箇所は、2024年9月4日に実施したNさんへのインタビューの内容である。

Nさんは大学在学中の2024年1月末から活動をはじめ、2025年3月末まで現地で長期に活動を続けてきた人物である。インタビューは半構造化面接形式でおこない、主に活動をはじめた1月末から時系列をたどりながら、どのような活動をおこなってきたのか、被災者との関係に変化があったのかについて話を聞いた。インタビューの詳細は表6の通り。

表 6 Nさんへのインタビュー概要（筆者作成）

日時	2024/9/4
手法	半構造化面接
内容	(1)1 月からどのような活動をおこなってきたのか、活動の変化について (2)活動の中で出会う被災者との関係にどのような変化があったのか
場所	オンライン会議システム「Zoom」
所用時間	1 時間 3 0 分

Nさんは2024年1月27日から能登半島でのボランティア活動を開始した。当初は、「よくわからずついて行って」おり、「何をしたら良いか、人とどう接したら良いか」わかっていなかった状態だった。能登半島での活動当初は、足湯ボランティアとして3〜4回ほど避難所で足湯を実施したほか、個人のお宅でも足湯ボランティアをおこなった。「足湯ボランティアははじめて」の活動であったこともあり、当初は「相手に警戒され」た中での活動となった。

その後は、拠点近くにあった避難所の朝食、夕食の手伝いが日課となった。朝5時から朝食づくりの手

伝いをおこない、日中はボランティアをして夕方17時から夕食の手伝いに行くという形である。もともと、避難所での手伝いは、Nさんよりも先に活動していたボランティアが日課としており、それを引き継ぐような形でNさんが活動するようになった。当初は、避難所の住民から「ボランティアさんという扱い」であった。

その後も継続してボランティアを続けるNさんであるが、時間が経過するにつれて他のボランティアが被災地を離れて帰っていくことが増えていく。そのことによって長期的な活動が可能であったNさんの立場は「逆に人を連れていくように」なっていき、そのころから「相手の反応が変わる」ようになっていった。

2025年2月以降はボランティアによる家の片付け作業が本格化していくのであるが、筆者が1月と2月に出席した支援団体同士のミーティングでは、ボランティアに対してなかなか依頼をしてもらえないことが課題として挙げられていた。筆者も被災した住民宅を訪問して回っていたが、なかなかボランティアを依頼する人はいなかった。町内会長にそうした状況を確認したところ、家族以外に手伝ってもらうのが恥ずかしい、気後れするという能登半島住民の気質があり、ボランティアの依頼を増やすには信頼関係を構築する必要があり時間がかかるということであった。そこで避難所に毎日通っているNさんが、朝食の準備の際に避難所にいる人たちとコミュニケーションをとり、ボランティアによる片付けが可能かどうかを確認する役割を担うようになっていった。さらに、Nさんは長期滞在することで現場作業のリーダーの役割を担うことも多くなっていき「住民さんと話すことが多く」なっていった。ボランティアによる片付けが進んでいくにつれて、ボランティアの依頼件数も多くなり、Nさんも避難所にいる人の家以外にも片付けに行き始めるようになる。それでも、避難所で仲良くなったTさんの家には「必ず行く」ようにしていた。そのころには、地域住民からNちゃんと呼ばれ、単なるボランティアという扱いから変化していた。

3月の後半には、避難所にいる住民も仮設住宅への入居が決まり、引越しの手伝いをするようになった。地域住民は仮設住宅へ入居してから「若返った」ように笑顔が増えてきた。Nさんは、仮設住宅に入居したTさんの家具と一緒に買いに行ったり、Tさんが料理を振る舞ってくれたりするようになっていた。

4月からは仮設住宅に通う機会も増えていった。N

さんは「見守りするイメージはなく、おばあちゃんの家に行くイメージ」で、「仮設には目的なく行っていた」という。実際に、筆者も一緒に活動していたのだが、Nさんは仮設に遊びに行くに出て行ったきり、2~3時間経っても帰ってこないということもあった。後から何をしていたのか聞いてみると、Tさんの仮設住宅に訪問して昼寝をしていたというのである。筆者がたまに見かけるTさんの反応を見ているとそう言った関係が心地よい様子が見られた。避難所で活動している際は、常に複数の住民が避難していて周りに人がいる中での関係であったが、仮設住宅に引っ越してからは1対1での関係も増えていき、関係もより変化していった。筆者も拠点で仮設住宅の住民との食事会を開催した際にNちゃんは特別や、とTさんがつぶやかれていたのを聞いた。支援者と被災者という関係を越えた関係になっているということであろう。

七尾市では、災害ゴミ集積所が2024年7月30日で閉鎖され、その後は地元のゴミ処理場での受け入れに変更された。しかし、持ち込めるゴミは可燃ゴミや木くず、金属くずなどに限定され、受け入れも1日20台に限定されてしまったため、これまで捨てられていた災害ゴミが捨てられなくなってしまった(大野, 2024)。こうした状況を受け、Nさんは活動の中で今まで「捨てられたものが捨てられず、モヤモヤすることも増え」ていたり、ゴミ集積場が閉鎖された際には「怒り」が湧いてきたりしたという。Nさんが活動中に意識していたのは、能登半島地震の発生前にボランティアとして活動に参加していた一般社団法人おもやいの「支援じゃないというマインド」である。このマインドは、専門分化していく支援ではなく、目の前の人が困っていればなんとかできないかと試行錯誤して、一緒に悩み活動していくおせっかいのことである(宮本, 2024)。Nさんのこうしたモヤモヤや怒りは、目の前の困っている人と一緒に悩んで活動しているが故に、目の前の人と同じような気持ちが生まれてきたということであろう。

Nさんに対する、当初の「ボランティアさんという扱い」からNちゃんという扱いへの変化は、Nさんが長期的に滞在し、活動のリーダーとなっていく過程で生まれてきている。つまり、Nさんがコミュニケーションを密に取る中で地域の復興を見据えていくという第四の〈反転〉である時間の射程による〈反転〉が起きていたということである。

6. 2. ボランティアするつもりが元気をもらう

次に、足湯ボランティアについても見ていこう。足湯の活動に参加した多くのボランティアが、「ボランティアするつもりが、被災者の方に元気をもらった」という感想を寄せている。以下に足湯ボランティアの感想を紹介していこう。

「私たちは支援者として現地に入ったつもりでしたが、派遣を終えてみて、逆に元気付けられたというか、被災された方々に支援してもらった感すらあります。「能登はやさしや土までも」と表現される「つながり」を大切にする文化が、そうさせたのかもしれない。支援を中長期で継続するにあたっては、支援者にとってのインセンティブとして、受援者とのつながり大切になるのではと思いました」(原文ママ)(2024年3月28日)(被災地NGO協働センター, 2024a)

「協力して作業を行うこと、意見を交わすこと、何気ない会話をする、地震という大きな障害から乗り越えようとする勇気や努力。日々の生活に溶け込んだ何気ないことから特別なことまで、たくさんことに集中することが自分の気を紛らわして楽しさを感じることができるので、少し大袈裟に言うと新しい生き方を見つけたと感じた時間となりました」(2024年4月1日)(被災地NGO協働センター, 2024b)

「震災という偶然を通して、たくさんの方々が集まって力を合わせて、能登の人のために活動していました。特に、CODEの拠点の小牧集会所は、それがわかりやすい環境でした。そんな中に身を置けたことで、出会いがたくさんありました。将来自分もこんな大人になりたいなと思う人とも出会えました。本当に参加して良かったと思います。また能登に行つてボランティアをして会いたい人がたくさんいます」(2024年5月16日)(被災地NGO協働センター, 2024c)

「いつも、足湯で出会った人がその後どうされているか、気になっていてもやもやしていた。今回久しぶりに行って再会した人が、一年前に足湯したときの話の内容までよく覚えていたり、他にも避難所の人に足湯に来てくれたよねという方々が何名かいた。すぐにまたお会いできたり、何かを直接したりはできなくても、誰かの心に残り続けることができていたんだな、と思った」(2025年3月6日)(被災地NGO協働センター, 2025a)

「私事になりますが、自身の祖母は現在アルツハイマーが進行しており、上手く話すことが出来ない状態にあります。能登で高齢の方と話すことで、昔祖母と楽しく話したことを思い出し、自らも救われたように思います」（2025年6月2日）（被災地NGO協働センター、2025b）

このように、多くのボランティアが「ボランティアしているつもりが、逆に元気付けられた」という感想を寄せている。足湯ボランティアに参加している学生の多くが、最初は「支援をするつもり」という「能動態／受動態」の構図で被災地に駆けつけている。しかし、足湯ボランティアの活動を通して、被災者と話をすることでその構図が変化していることがわかる。足湯ボランティアは、目の前の被災者の気持ちを尊重しながら、被災者の抱える苦悶の体験をどのように受け取るのか葛藤するが、そのこと自体がボランティアと被災者を近づけている（三井、2015）。誰よりも葛藤し、言葉を失っているのは被災者自身であるにも関わらず、その言葉を受け取り困惑し葛藤するボランティアが、被災者にとってはある意味でとても弱い存在に映る。その弱い存在が、葛藤しながらも自身の言葉に向き合おうとするが故に、被災者がボランティアを気遣ったり、人生について相談に乗ったりするのである。

似田貝（2015）によれば、身体の接触も伴う足湯ボランティアは、私があなたに共感するという一方通行の共感ではなく、異なる主体間で影響しあう双方向的な共感が生まれていると指摘する。つまり、足湯ボランティアを通じて、被災者へのケア活動であるとともに、ボランティア自身も癒されるような双方向の〈ケア〉が成立することになる。このように、被災者と足湯ボランティアの出会いによって、第一の〈反転〉が生じ「能動態／受動態」の構図を乗り越えた「能動態／中動態」の構図へと変化が生まれているということである。

7. ケア活動と〈反転〉

7.1. ケア活動と応答と〈反転〉

改めて確認すると、〈ケア〉が生まれるのは、当事者の何らかのサインが受け取られ、何らかの対応がはじまったときであった（村上、2021）。しかし、このサインは必ずしもわかりやすい形で投げかけられるものばかりではなく、相互の努力が必要である。すなわち、ケア活動として支援する側はサインを聞き取ろうとする姿勢を持つこと、そして支援を受け

取る側はサインを出す努力をすることである。支援する側は、サインを受け取ろうとする際に、相手の立場に立とうとする努力が非常に重要である。相手の立場に立とうとする努力とは、相手の行動が自分の想定を超えた意外性を持つことを許容するということでもある。伊藤（2021）は、利他的な行為の本質はケア活動にあり、ケア活動には必ず意外性が存在していると指摘する。また、安心とは相手の行動がコントロール下に置かれていると感じている状態のことを指し、信頼とは相手が想定外な行動をとり自分が不利益を被ることを前提としており、信頼のない利他は押し付けであると指摘する。ケア活動としての利他は、支援する側の思い通りにならない計画外の可能性へ開かれており、「他者の発見」が含まれている。そこには「自分自身の変化」も含まれているという。自分自身の変化とは、支援する相手に対してあらかじめ予測できるという前提にたつのではなく、予想外のことが起きると想定しながら相手の話を真摯に「聞く」という行為が重要であり、「聞く」という行為を通して自分の評価軸が変化することである。つまり、ケア活動という行為を通じて、相手の話を聞き自らの内側へどのようなことができるのか、と問いを発することによって、自分の評価軸が変化していくというプロセスのことである。こうしたプロセスを経たケア活動が〈ケア〉となる。この問いは、「ボランティアは何ができるか」という問いと一見すると似ているが、根本的に異なっている。「ボランティアは何ができるか」という問いは、主としてボランティア活動の外側から問いかけられるものであり、行為のプロセスや相手とは関係なく完結する問いである。一方で、相手の話を聞き自らの内側へどのようなことができるのか問いかけるのは、行為のプロセスの内側に位置しなければ生まれてこない。相手との相互関係によって成り立つ問いであり、相手とのコミュニケーションがなければ成り立たない。このように問いがどこから発せられているのかという点で全く異なっているのである。

重要な点は被災者に対して一般ボランティアが応答しようとするということであり、その応答が責任の生成につながっているという点である。國分（2021）は、中動態においてとらえられる責任は、相手に対して自らが応答せねばならないとする時に生成すると指摘する。何らかの行為に対して責任を感じるのは、その行為の内側に自らが置かれ何らかの応答をせねばならないと自覚した時である。ボランティアとして、被災者を目の前にし、何とかその人に応え

ようとするその姿勢は、中動態的な責任を果たそうとする応答なのである。そして、その応答をするためには、相手を知り相手の声に耳を傾けるしかなく、どのようにすれば相手へ応答できるのかを問うことになるのである。つまり、応答とは「他者の発見」であり「自分自身の変化」なのである。被災者の声に応答しようとすることによって、「能動態／受動態」の構図から「能動態／中動態」への〈反転〉は発生し、その〈反転〉が〈ケア〉が生まれる時なのである。

7.2. 終わりに

ここまで見てきたように、ボランティアと被災者との関係が「能動態／受動態」の枠組みから「能動態／中動態」の枠組みへと〈反転〉した時に、〈ケア〉が生まれる。この〈反転〉は、ボランティアが被災者を目の前にして、被災者への応答をしようとすることによって、被災者を発見し自らを変えるプロセスであった。そして、そのプロセスは他者を自分のコントロール下に置くような安心ではなく他者の意外性を引き受ける信頼を前提としている。

こう考えると、「ボランティアは何ができるか」という問いのもとでの活動は安心を求めるものであると言える。つまり、ボランティア活動をおこなった際の相手の反応をコントロール下に置くことができる活動をやりましょう、という呼びかけなのだ。それはつまり、ボランティア活動が被災者の外側から始まり外側で完結するという他に他ならず、「能動態／受動態」の枠組みを保存するものとなる。そして、この構図のもとでは、ケア活動をおこなうボランティアは不可視化されてしまうのである。なぜなら、〈ケア〉とは不確実性を前提としたものであり、相手の反応をコントロール下に置くことはできないからである。

鷲田（2015）は、解釈をおこなわないという治療法を例にあげながら、ケア活動は「何のために」という問いが失効するところ、行為の意味の外側でなされると指摘する。被災者であるからとか、被害を受けた人だからとか、そういった理由で世話をするのではなく、ただあなたがいるという理由の世話こそがケア活動であるという。鷲田のいうケア活動には、「能動態／受動態」の枠組みの中にある「ケア」では到達できない。「ケア」には必ず受け手がおり、「何のために」という問いが前提にあるからである。「ボランティアは何ができるか」という問いそのものが、被災者を行為の外側に追いやり、ボランティ

ア活動に意味付けを施し、ボランティアが〈ケア〉の担い手であることを不可視化するのである。同様に、一般ボランティアと専門ボランティアを分断することも、ボランティア活動への意味付けと〈ケア〉の担い手としてのボランティアの不可視化を進めていく一因となっていることは明らかである。

「ただあなたがいる」ということによるケア活動は、その人の固有性に着目した〈ケア〉ということである。阪神・淡路大震災の際のボランティアは、目の前の被災者の〈生の固有性〉にこだわってきた（似田貝、2006）。〈生の固有性〉にこだわるとは、被災者を一括りにせず、たった一人のかけがえのない人間としてその人自身が固有の存在であるということにこだわるということである。ボランティアが〈生の固有性〉に向き合うところから、〈反転〉が作動しはじめ、〈ケア〉はひろがっていくのである。

謝辞

本研究では、石川県七尾市中島町小牧地区のみなさま、活動に参加したボランティアのみなさまに大変お世話になりました。ここに記してお礼申し上げます。本研究はJSPS科研費23K18855の助成を受けたものです。

補注

- (1) 専門ボランティアと一般ボランティアをわけて考えるというのは、令和6年能登半島地震から始まったわけではなく、すでにコロナ禍の災害時においてもそのような議論がなされている（e.g.高林、2021・全国社会福祉協議会、2022・福岡県社会福祉協議会、2022）。令和6年能登半島地震はこうした分断をさらに拡大させたと解釈することができるだろう。
- (2) Googleを用いて2025年6月に検索した結果である。

参考文献

- 渥美公秀（2019）．〈助かる〉社会に向けた災害ボランティア誘導化のドライブの活性化― 災害と共生, 3(1), 49-55.
- 渥美公秀・頼政良太・大門大朗（2024）．被災地の支援団体・災害ボランティアの状況と課題:石川県七尾市中島町を中心とする救援・支援活動から 日本災害復興学会学会誌『復興』, 32号, 12(3), 10-16.
- 福岡県社会福祉協議会（2022）．新型コロナウイルスの影響下における市町村協災害ボランティアセンター設置・運営上の留意点（ver.4） 福岡県社会福祉協議会被災地NGO協働センター（2024a）．「令和6年（2024年）

- 能登半島地震救援ニュース」No.40 「やさしや足湯隊ニュース」No.1, <https://ngo-kyodo.org/2024noto/2024/03/28/>「令和6年（2024年）能登半島地震救援ニュース」no-40%E3%80%80/（2025-6-5）.
- 被災地NGO協働センター（2024b）.「令和6年（2024年）能登半島地震救援ニュース」No.41 「やさしや足湯隊ニュース」No. 2, <https://ngo-kyodo.org/2024noto/2024/04/01/>「令和6年（2024年）能登半島地震救援ニュース」no-41-/（2025-6-5）.
- 被災地NGO協働センター（2024c）. 令和6年（2024年）能登半島地震救援ニュースNo.63, <https://ngo-kyodo.org/2024noto/2024/05/16/>令和6年（2024年）能登半島地震救援ニュース%E3%80%80no-63/（2025-6-5）.
- 被災地NGO協働センター（2025a）. 令和6年（2024年）能登半島地震救援ニュースNo.127, <https://ngo-kyodo.org/2024noto/2025/03/06/>「令和6年（2024年）能登半島救援ニュース」no-127/（2025-6-5）.
- 被災地NGO協働センター（2025b）. 令和6年（2024年）能登半島地震救援ニュースNo.132, <https://ngo-kyodo.org/2024noto/2025/06/02/>「令和6年（2024年）能登半島救援ニュース」no-132/（2025-6-5）.
- 石川県（2024a）. 記者会見の要旨 - 令和6年2月14日 -, https://www.pref.ishikawa.lg.jp/chiji/kisya/r6_2_14/1.html（2025-5-21）.
- 石川県（2024b）. 第54回災害対策本部会議会議資料, <https://www.pref.ishikawa.lg.jp/saigai/documents/0821siryou2.pdf>（2025-6-5）.
- 伊藤亜沙（2021）. 「うつわの利他」——ケアの現場から 伊藤亜沙・中島岳志・若松英輔・國分功一郎・磯崎憲一郎 「利他」とは何か（pp.46–63） 集英社
- 環境省（2020）. 人とペットの災害対策ガイドライン ボランティアの活動と規範, https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/r0204a/a-1a.pdf（2025-7-23）.
- 川村直子（2024）. 能登半島地震で「被災地に来ないで」が続くのはなぜ？東日本大震災の教訓から、緊急消防援助隊に配備された重機が、活用されない理由とは, https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_65b9faae4b0102bd2d6dd81（2025-11-18）.
- 國分功一郎（2017）. 中動態の世界：意志と責任の考古学 医学書院
- 國分功一郎（2021）. 中動態から考える利他——責任と帰責性 伊藤亜紗・中島岳志・若松英輔・國分功一郎・磯崎憲一郎 「利他」とは何か（pp. 147–178） 集英社
- 松原悠（2020）. 中動態と避難 災害と共生, 3(2), 15–26.
- 三井さよ（2015）. いっとき傍に立つ：つぶやきから見る被災者の苦闘と足湯ボランティアの意義 似田貝香門・村井雅清（編著）震災被災者と足湯ボランティア—「つぶやき」から自立へと向かうケアの試み（pp.144–170）生活書院
- 三井さよ（2018）. はじめてのケア論 有斐閣
- 三井さよ（2021）. ケアと支援と「社会」の発見——個のむこうにあるもの 生活書院
- 宮前良平（2024）. 令和 6 年能登半島地震発災初期における X でのボランティア言説の検討 自然災害科学, 43(3), 551–560.
- 宮本匠（2024）. <ひとごと>から<われわれごと>へ：それぞれの1.17に 日本災害復興学会学会誌『復興』, 33号, 13(1), 25–30.
- 村上靖彦（2021）. ケアとは何か 中央公論新社
- 中井久夫（2011）. 災害がほんとうに襲ったとき——阪神大震災50日間の記録 みすず書房
- 七尾市（2024a）. 支援物資のお知らせ【1月16日分】（1月15日 午後 8時30分）, https://www.city.nanao.lg.jp/bosai/mail/20240115_11.html（2025-6-5）
- 七尾市（2024b）. 支援物資のお知らせ【1月19日分】（1月18日 午後 9時0分）, https://www.city.nanao.lg.jp/bosai/mama/20240118_10.html（2024-6-5）
- 七尾市（2025）. 七尾市行政区別世帯数および人口集計表, <https://www.city.nanao.lg.jp/shimin/documents/gyouseiku.pdf>（2025-6-5）.
- 日本財団ボランティアセンター（2025）. ボランティアの基礎知識, <https://vokatsu.jp/knowledge/saigai/>（2025-7-23）.
- 似田貝香門（2006）. 〈一人の人として〉をめざす支援の実践知 柳田邦男・黒田裕子・大賀重太郎・村井雅清（共著）似田貝香門（編）ボランティアが社会を変える（pp.181–198）関西看護出版
- 似田貝香門（2015）. ケア活動のひろがり実践理論としての足湯活動 似田貝香門・村井雅清（編著）震災被災者と足湯ボランティア—「つぶやき」から自立へと向かうケアの試み（pp.208–227）生活書院
- 野田正彰（1995）. 災害救援 岩波書店
- 岡野八代（2024）. ケアの倫理——フェミニズムの政治思想 岩波書店
- 大野沙羅（2024）. 【石川】廃棄物仮置き場 閉鎖に列 七尾、車100台近く 延長求める声 中日新聞 7月31日, <https://www.chunichi.co.jp/article/936266>（2025-8-17）.
- 高林秀明（2021）. コロナ禍における災害ボランティア活動の課題と教訓：熊本豪雨災害の11ヶ月の経験から 日本災害復興学会学会誌『復興』, 26, 12(3), 10–16.
- 高尾具成（2025）. 能登半島地震：能登半島地震 結び合う、能登の被災者 七尾で見た「えー」の精神 毎日

頼政：〈ケア〉の担い手としての災害ボランティア

新聞 1月11日夕刊, 7.

竹端寛 (2023) . ケアしケアされ、生きていく 筑摩書房

Tronto, Joan (2013) . *CARING DEMOCRACY——Markets, Equality, and Justice*. NEW YORK: NEW YORK University Press.

(岡野八代 (監訳) 相馬直子・池田直子・富岡薫・對馬果莉 (訳) ケアリング・デモクラシー：市場、平等、正義 勁草書房)

上田敏 (1983) . リハビリテーションを考える——障害者の全人間的復権 青木書店

鷺田清一 (2015) . 「聴く」ことの力：臨床哲学試論 筑摩書房

Yahoo Japan (2022) . 災害ボランティアの心得, <https://emg.yahoo.co.jp/notebook/contents/article/volunteer220613.html#被災地に負担をかけない準備が大切> (2025-5-21) .

矢守克也 (2019) . 能動的・受動的・中動的に逃げる 災害と共生, 3(1), 1-10.

頼政良太・宮本匠 (2022) . 日本における災害ボランティアセンターのこれまでとこれから—「公」と「民」の対立を乗り越えた先に 実験社会心理学研究, 61(2), 37-56.

頼政良太 (2023) . ベースの支援に根差した災害時の多様な活動を生み出す〈場〉についての研究：一般社団法人おもやいの活動から 災害と共生, 7(1), 1-15.

頼政良太 (2024a) . 令和6年能登半島地震でのボランティア活動 日本地震工学会誌, 53, 31-33.

頼政良太 (2024b) . 災害ボランティアの探究——アクション・リサーチによる実践研究 関西学院大学出版会

頼政良太 (2025) . 能登半島地震における足湯ボランティアの役割についての考察 地域安全学会梗概集, 56, 258-260.

吉椿雅道 (2015) . 足湯ボランティア 似田貝香門・村井雅清 (編著) 震災被災者と足湯ボランティア—「つぶやき」から自立へと向かうケアの試み (pp.16-31) 生活書院

全国社会福祉協議会 (2022) . 新型コロナウイルス感染が懸念される状況における災害ボランティアセンターの設置・運営等について～全社協全国ボランティア・市民活動振興センターの考え方～ 全国社会福祉協議会